

## 頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム パラオ共和国出張報告（平成 24 年 3 月 18 日～3 月 24 日）

出張者：水野 一晴（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授）

出張期間： 2012年3月18日～24日

出張先： ベラウ国立博物館

出張報告：

コロールにあるベラウ国立博物館を訪問し、館長のオリンピア・モーレイ（Olympia Morei）氏と会い、「頭脳循環」事業を含め、今後の学术交流および教育研究に関する相談を行った。2012年4月～11月に博物館に頭脳循環で派遣される紺屋あかりさんの受け入れのための費用等について協議を行った。

博物館では展示物を見せてもらい、パラオの歴史や文化、自然について貴重な情報を得ることができた。コロールではシニアシチズンセンターをも訪問した。ここはパラオの老人会の人々が集まり、伝統的なパラオの文化を継承するために、タコの木（パンダナス）の葉で編んだ小物やカバンを作っているが、ここで紺屋さんのインフォーマントの Antonina Antonio さんにも面会し、話をうかがった。また、ペリリュウ島を訪れ、第二次世界対戦時に戦場になった現地を視察した。

パラオの北部に位置するカヤンゲル環礁は、典型的な環礁であるため、その地形や自然を観察するために訪れた。

第一次世界大戦後にパラオは国際連盟より日本に委任された統治領であったため、そのころの日本語教育の影響で、多くの外来語が日本語を使用している。デンキ、デンワ、センブウキ、センセイ、ダイトウリョウ、クルマ、ハイシャ、オキヤク、クルマ、オツリ、ハゲ（はげ山から）、ハブラシなどである。また、パラオの人名も日本名が数多く見られた。



写真 1 シニアシチズンセンターで、タコの木（パンダナス）の葉で民族衣装を編んでいる人



写真 2 シニアシチズンセンターで、花札に興じている高齢者の人たち



写真 3 ペリリュー島にある第二次世界大戦時における日本軍の司令部跡



写真 4 カヤンゲル環礁